【ねがいましては】

平成２０年９月１日　　*KYOWA SCHOOL*

第２１４号

「本物の先生はとなりにいるかもね」

さいこＣＡＭＰ最終日、誰もが同じ事を言っていました。「はやーい！」

私自身も同様、今年ほど早く終わってしまったＣＡＭＰはあまり覚えがないのです。

毎年必ずあるドラマ、ありました。

「ＣＡＭＰがお正月なんです。」と言って参加してくれるMちゃん。私からは「ムスメ」と言われています。２５歳になる彼女は、もとは私の珠算関係の先輩先生の生徒さんでした。１７歳のとき、ちょっとしたきっかけで私のＣＡＭＰに参加､それ以来毎年必ず参加してくれるようになりました｡結婚してからも引き続き参加してくれます。昨年、のどの付近が少し腫れているということで精密検査、リンパ系の『がん』でした。教室では毎日のように中学生たちが中心になって鶴をおってくれました。そして入院治療が始まりました。祈るだけ、祈ることだけ。その祈りが１羽１羽に込められます。

そして元気にＣＡＭＰに帰ってきました。生きているだけでいい、生きることの意味を感じます。健康であることの意味を思い知らされました。ありがとね。

Ｓちゃん、昨年の春、この教室に通う中学生からの２通のメールが、彼女の心を浪人への決心へと導きました。先生になりたい、どうしてもなりたい。その夢は今春、教育学部合格という一歩前進につながりました。大学１年生としての参加、メールをくれた２人も中学３年生になりＣＡＭＰに参加してくれました。縁あってこの教室の中で知り合った先輩と後輩、後輩の一言が先輩の人生を変えたのです。『ひと』でよかったね。

Ｆさん、教え子でもない彼が、この教室に来るようになってもう１６年、結婚され、お２人のお子さんをもうけられ、りっぱな一家の主（あるじ）として社会で活躍なさっています。そんなＦさんもＫＹＯＷＡの大ファンです。ある年は､子どもたちの輸送だけのために来てくれたり､またある年は､直前になり骨折され悔し涙を流されたり。今年は３泊もされました。あとでわかったことですが、お盆休みを振り替えていたとのこと。ご家族の復讐にあっているのではとハラハラしています。そんなＦさんも『ひと』になりきっていました。３日目の夕方の炊飯です。ご飯は大釜を使って薪で炊きます。「Ｆさんよろしく」と、私のお願いにガッツでとりかかりました。１０分経過、火がつきません。連日の雷雨で薪もすっかり湿っています。２０分経過・・・３０分経過・・・子どもたちのつくるおかずもすでに出来上がりつつあります。私は「Ｆさん・・・。」と、ちょっと意地悪ですが・・・。彼の中では悔しさと焦りが交互に波打っています。「Ｆさん・・・。」少し間をあけて、「Ｆさん、変わろうか・・・。」と私。「・・・・うーん悔しい、けどこれ以上生徒さんたちに迷惑はかけられません。お願いします。」

そして数分後、またたく間に火がつきました。「うーん悔しい、本当に悔しいです。」とＦさん。あまりにも簡単に火がついたので、私もこれはドラマチックすぎると、ちょっと感動。それもそのはずなのです。Ｆさんがチャレンジしている間に、薪たちは適当に暖められ、すっかり乾燥していたのです。

「先生､わたし子どもたちに謝ってきます。」Ｆさんはひとつひとつバンガローを回り子どもたちに謝っています。少しアルコールも入ってはいたのですが、Ｆさんは童心になりきって、失敗を全身で受け止め、子どもたちに心から謝っている・・・。そして約３０分後、炊き上がったご飯をもらいに来る子どもたちに、またひとりひとりに謝っている。よかったね、Ｆさん。『ひと』でよかったね。「これが本当の本物の生きる姿だね。」と、私。近くで見ていたMちゃんも、久しぶりにきれいな涙を流しています。３０歳半ばを迎えた男性が、小学生・中学生に心から謝罪している。このような方こそ『先生』と呼ばれる資格のある方ではないでしょうか。

子どもたちよ、本物の『ひと』に出会えてよかったね。Ｆさんから教わったこと、忘れないでね。

教わるってこのことなんだよ。黒板前にして教わることが、いかに薄っぺらいものか分かるよね。『先生』と呼べる人は学校の先生ばかりじゃないんだよ。君たちのすぐとなりにいる人こそ本当の本物の『先生』かもしれないよ。

今年のＣＡＭＰは、たくさんお手伝いをしたね。ＣＡＭＰ場のマスターさんが、今年春から長期にわたり入院治療をされている関係で、マスターさんのご家族がなんとかその穴を埋めようとがんばっていらっしゃいます。困っている人をお手伝いするのは当たり前のこと。布団干し、布団取り入れ、毛布たたみ、バンガローそうじ、ぞうきんがけ・・・いっぱいやったね。「ありがとう」っていっぱい聞いたよね。「ありがとう」って聞いたとき、こころがポカポカしていたこと、忘れないでね。

「わたし、スタッフやるまで絶対にＣＡＭＰ行く。」・・・Ａちゃんありがとう。

「ＣＡＭＰ行きたかった。」・・・電話の向こうでそう叫んでくれたＣちゃん、ありがとう。

「おかえりー」と言って出迎えてくれたＣＡＭＰ場の奥さん、ありがとうございました。

そしてこれをお読みいただいているお父さま、お母さま、ここに通う子たちは日本一、いや世界一、深い思いやりを、底知れぬやさしさを持っています。なぜなら『家族』を一番に思う子たちばかりだからです。

今年のＣＡＭＰ、４泊５日、すばらしい家族でした。ありがとう。　　マスター・・・ありがとう。